

14 娘シオンよ、喜び叫べ。イスラエルよ、歓呼の声をあげよ。娘エルサレムよ、心の底から喜び躍れ。15 主はお前に対する裁きを退け、お前の敵を追い払われた。イスラエルの王なる主はお前の中におられる。お前はもはや、災いを恐れることはない。16 その日、人々はエルサレムに向かって言う。「シオンよ、恐れるな、力なく手を垂れるな。17 お前の主なる神はお前のただ中におられ、勇士であって勝利を与えられる。主はお前のゆえに喜び楽しみ、愛によってお前を新たにし、お前のゆえに喜びの歌をもって楽しまれる。」18 わたしは、祭りを祝えず苦しめられていた者を集める。彼らはお前から遠く離れ、お前の重い恥となっていた。

### 【説教】

今日の聖書の言葉には、喜びとか楽しみとか、あるいは喜びの歌を歌って楽しむといった明るい言葉が目立ちます。特に、「主なる神があなたたちの中におられる」という言葉が、この短い聖書箇所の中に2回もあります。神さまが私たちと共におられるのは、私たちに喜びをもたらし、日々の生活の中で私たちを楽しませてくれるためなのだと、そう聖書は言いたいのですね。

このことは、本当に大切なことだと思います。信仰をするということ、神に頼って生きて行くのは、私たちが喜んだり、楽しんだりすることが目的なのだとことです。つらい思いをしたり、悲しむことが目的ではないのです。言われてみるとあたりまえなのですが、意外とこのことは忘れられがちなことではないでしょうか。

もし、今、つらさを覚えたり疲れているとしたら、私たちが向かっている方向がどこかおかしいのかもしれませんがね。この主なる神があなた方のそのただ中におられるという言葉聴いて、良い思いを抱くのか、それとも悪い感情を抱くのか一つのバロメーターになると思います。出来れば神の存在を忘れていたい、神の厳しい目から隠れたい、逃れたいという状態は、健康な状態とは言えません。言ってみれば、信仰の病に冒されているとも言えなくもないでしょう。

本来、神さまがすぐ側で一緒にいてくださるのは、私たちを守ってくださるためです。私たちが、どのようなところにしようとも、その中で喜びを見いせるために一緒にいてくださいます。何をしても少しでも楽しくなるようにと、そのことを教え導くために、共にいてくださるのです。言い方を変えてみれば、私たちが「いのち」に導くために、私たちのただ中に神は来てくださったのだということです。この「いのち」とは、真の命とか、永遠の命と聖書の中では言われています。この生きることを喜べるいのちに、楽しむことができる私たちのいのちに導くことが、神さまの目的なのですね。

それでは、どういうときに、私たち人間は喜べるのでしょうか。幸福度が高いのはどのような環境に置かれたときなのでしょう。それは、安全な状況に置かれたときでありますね。恐れや不安のない関係が、周りや築けている状況の時です。誰からも責められたり傷つけられないところに置かれたら、特に何か楽しいことをわざわざしなくても、自ずと人は楽しめやすし喜びが湧いてきます。それが、逆にいつとがめられるのかわからない、失敗したら責められるのだろうなど予想できる場所では、喜びの感情は生まれては来ません。圧迫感や高圧的な緊張感に支配されている場所というのは、何をしても楽しくないのですね。

本来、いのちを与えてくれるはずの信仰が、反対にいのちを締め付けるものになっているとすれば、このあたりがひっくり返ってしまっているのかもしれませんが。私たちに安全な場所を与えてくれるはずの神さまが、反対に私たちを必要以上に責め立てて苦しい状況に追い込んでいるのだと、思い込んでいるということが起こっているのかもしれませんが。私はこのことがけっこう教会の中であると感じていますし、社会の中でも結構そのように受け取られてしまっていると感じています。

どうしてそういうことが起こってしまうのかと考えてみますと、それは「神の裁き」ということのとらえ方がかなりずれているからではないかと思えます。「神は、罪を犯す者を罰せずにはおかない方だ」という思いが、必要以上に強く大き

くなりすぎていて、この神による断罪をととも恐れてしまっているのだということです。この聖書箇所の中には、「シオン」という言葉と「エルサレム」という言葉がどちらも2回ずつ用いられていますが、これは同じ場所を指しているものです。このシオン、エルサレムには、礼拝するところである神殿が存在しています。また、18節には「祭りが祝えずに苦しめられている」とあります。この祭りというのが、神を賛美し本来は喜び楽しむことのできるはずの礼拝のことです。この礼拝は、まさに「共に生きる神さま」との関係を決定してしまう中心的な場所なのです。ここで神さまとの関わり方がずれてしまえば、その後すべてのところで生活の様々な部分で狂いが生じてきてしまいます。ですので、礼拝では本来一番何が大切にされなければならないのか、今日改めてここで確認したいと思います。

確かに、聖書の中では神は罪を犯したものを裁くと言われています。今日の聖書の言葉はゼファニヤという預言者の語った言葉ですが、全3章の中で神の裁きを告げています。ここで裁かれるはずの罪とはなにかと言えば、それは「不正」を行うことだと言われています。その不正の内容とは、「公平さと神の議」を損なうことです。公平さというのは、対等な関係を保つこと、互いが平等な立場で関わることです。立場に上下がないということで、同じ地平に立つことで、みんな横一列に並ぶことであります。この公平さが崩れてしまいますと、人間の関係というのはとたんに恐れや不安で支配されてしまいます。先ほど言いました、神さまが私たち人間を喜ばせようと与えてくれた安全な場所を壊してしまうことになってしまいます。ですから、いかに安全地帯を守ることができるかということのために、神さまは私たちを教導してくれるのです。何かいたらないことがあったり失敗してしまったときに、責められてしまうことからいかに守ることができるのか、そのことに神さまは心を砕いてくださいます。この安全な環境を脅かすことが罪であり、不正なのだということです。神は、つまり赦しという信仰の中心点において、まず、礼拝に集う人々を守ってくれる方だということです。

そして、神の議の方ですが、聖書では正義と訳されていますから、これも勘違いされやすい聖書の言葉だと思います。神の議の中身を見てみますと、そこには神の憐れみや慈しみが核心部分にあります。ですので、未熟だったり、まだまだこれからという小さな存在を、いかに保護して守れるかということに神は関心を寄せているわけです。神は、安全な場所で私たちがのびのび育って行けるように、まず、礼拝の場所をそのように整えられるということです。そのようにすればその他の生活の場面は、自ずと安全で赦しによって支えられた喜びが生まれてくる場所になって行くのだというわけですね。

このように罪への裁き不正への裁きというのは、これらは怖いものではなく、私たちを守ってくれるためにあるものです。むしろ、神の裁きを利用して人々を恐れさせ支配しようとする人こそ、裁かれなくてはならないのだというわけです。ここで、神の裁きの間違ったとらえ方を、例を一つあげて考えてみたいと思います。

ずっと以前になりますが、小学校の授業参観に行きました。道徳の時間でしたが、いじめについて考えるという内容でした。子どもたちは、人を傷つけるひどい言葉を挙げて黒板に書いて行きました。体型のこと、太っているとかやせているとか、確かに言うのをやめた方が良いことです。ただ、その時の先生の指導の仕方が、私にはどうもしっくり来ませんでした。それはどうしてかと言いますと、先生はずっと怒っていたんですね。人を傷つけることを言ったりしたりしては絶対だめなんだということを伝えたかったのだとは思いますが、確かにそのことは間違っていないと思います。しかし、強くだめだと言えば、それで伝わるわけでないなと思います。先生というのは子どもからするととても強い立場にいます。先生という權威によってすごく高い上の方から、責めすぎたり、追い込みすぎてしまいかねません。

「指導死」という言葉があるそうです。行き過ぎた指導によって子どもが自殺してしまうという意味です。この言葉を造ったのは大貫隆志さんという方です。大貫さんの息子さんは中学校二年生の時に、学校でお菓子を食べました。そのことを先生に指導されますが、1時間半の間立たされたままでした。その翌日息子さんは自殺をしたのです。同じように小学校、中学校、高校でこの10年間で37人の子どもたちが行き過ぎた指導の果てに、自殺をしているとのこと。子どもは未熟さの故に間違いを犯します。しかし、一度や二度失敗したからといってそれで終わりということはありません。子どもたちはちゃんと自分が間違っているとわかれば、何度でもやり直すことが出来るのです。強すぎる裁く行為は、その回心を許さずに、心を、「いのち」をつぶしてしまいます。

神の裁きも同じですね。神は決していのちを殺してしまうために、私たちをご指導することはなされません。もし回心することが必要なら、適度な強さで導いてくださいます。公平であること、対等であることを私たちに望まれてる神さまは、まずご自身が率先して私たち未熟な人間のところまで降りて来てくださいます。上に立つ者は、下に降りてくることで同じ地平に並ぶのです。まだまだ未熟な者には、その成長具合に合わせて適切な言葉を選んで、良き道を示してくださいます。指導というのは、指導する相手を喜び楽しむことの出来るいのちに導くために行われるものです。そうならば、その指導する道の過程も、やはり喜び楽しみながら、指導する方もされる方もあるべきであります。

聖書の言葉には、確かに厳しい言葉もあります。このゼファニヤ書も全体としては裁きの言葉が多くあります。どうしてそうなのかと言えば、それは緊急事態が起こったから、どうしても厳しくならざるをえないとそうに言えると思います。たとえば、目の前で誰かが食用キノコと間違えて毒キノコ食べようとしているとします。その人は気がついていません。そのときどうするでしょうか。「それは毒があるから、食べるのをやめておいた方が良いよ。」と、悠長には言ってはられないでしょう。「食べたらだめだ！ やめろ！」と無理矢理でも取りあげると思います。いじめもそうですね。今、目の前で誰かが傷つけられていたら、体を張って体当たりしてでも止めるでしょう。それを体罰だ、暴力だとはいちがいに言えないと思います。厳しい聖書の言葉というのは、そのような私たちの安全を最優先する神の働きかけなのです。神さまが体を張って止めるのは、危害を受ける者たちを守り、そして危害を加える方もそれ以上罪が大きならないようにするためだというわけです。

と、そのように言いますが、旧約聖書は、やはり、ちょっと厳しい言葉が多すぎるようにも思われます。このゼファニヤ書1章2, 3節では、人間が悪いのですべての生きものごと滅ぼすとまで言われています。また連帯責任を持ちだして来たと少々うんざりしてしまいます(創世記 6 章5-7節参照)。少し度が過ぎていないか、神の権威を振りかざしすぎてはいないかと思わないでもないです。そこで、神も考え直されたのですね。このまま怒って立ち返るように言い続けても、人間は耳を閉ざすだけだ。かえってますます意固地になって、かたくなになるだけだと。神さまは、ここで方針転換をなされました。神さまはイエス・キリストをこの地上に派遣することで、人間の導き方を変えられたのです。旧約聖書と新約聖書を比べてみますと、裁きの言葉と赦しの言葉が見事に逆転しています。文字の分量としては、新約聖書は旧約聖書の三分の一です。これは、人間を責める厳しい言葉を削ったら、とてもスリムになったのだと言えるかもしれません。

新約聖書の中で一つその方針転換の例を挙げてみたいと思います。イエスさまが語られる神の言葉を、一番かたくなに耳を閉ざした人たちに、ファリサイ派というグループの人々がいます。彼らは何かとイエスさまに批判的でしたが、しかしイエスさまはあきらめることなく彼らと一緒に食事をしたり、議論したり、忍耐強く関わり続けます。しかし、どうしても、彼らはその言葉を聞けなくなると、イエスさまは彼らと袂を分かち「あなたたちなりにこれから学んで行きなさい」と離れられました(マタイ 9 章 13 節)。このイエスさまの行動は、彼らを突き放して見放したようにも思えますが、しかしこれは怒ってしたのではなく、その人が置かれている状況、その人の到達している段階に合わせたのであり、後は神の御手に委ねられたのです。たとえ神の言葉であっても、どうしても聞けないという時というのは無理して聞いても楽しくないし喜ばません。無理強いしないということ。これも愛だと思います。じっと時を待つということも、相手に安心を与える機会とすることが出来ると思います。少しでも安心して自由に、対等にいられる場所を造っておくということも、りっぱなキリスト教の伝道なのだと思います。

私たちは、神さまに導かれ教えられて、恐れや不安のない場所を造り出すことが出来ます。そして、そのようにして私たち一人一人が喜んでいところ、楽しんでいところを見ることが、神さまにとっての何よりの楽しみであり、喜びなのですね。今、不安や、恐れの中で苦しんでいる多くの人々が、神さまの愛によって癒やされ守られますようにお祈りいたします。そして、そのような人々の逃れの場所に、キリストの教会がますます整えられますように共に祈りましょう。